

命の大切さ

中 三

私には、今年で十歳になるはずだった弟がいた。友達には私は三人姉弟だと思われているが、周りの人たちには知られていない家族がもう一人いる。

十年前の七月十二日にそれは起こった。母が突然苦しみだした。その頃、母のお腹には赤ちゃんがいた。私には一人弟がいて、二人目の弟、新しい家族ができるのだとワクワクして過ごしていた。出産日も近くなり、母のお腹もだいぶ大きくなっていた。家族全員がその子の誕生を心待ちにし、名前も段々と決まってきた矢先の出来事だった。母は救急車で運ばれて病院へと向かった。私は「母が死んでしまうのではないか」と、とても怖かったことを今でも覚えている。

翌日、帰ってきた父に弟のことを尋ねたら、「天国に行ったんだよ。」

と返ってきた。まだ幼かった私は全てを理解することはできなかった。しかし、弟にはもう会えないということだけは理解することができた。その

後、病院へ行って見たのは、泣いている母と冷たくなった弟の姿だった。あとから聞いた話だが、弟は産まれたときに肺がふくらまず、呼吸ができなかったそうだ。生まれて泣くことができなかったと両親は寂しそうに語った。

母が退院しても我が家には重苦しい空気が漂っていた。その間、両親からは、

「命を大切にしてくれ。」

と言われた。当時は何を言っているのか分からなかった。でも、今なら両親が何を伝えたかったのか分かる。両親は「この世に生まれてきて、今生きていることは当然のことではない。一つしかない自分の命、家族、友達の命を大切に生きていってほしい。」このようなことを伝えたかったのではないかと思う。

私は現在、両親と二人の弟と過ごしている。二人目の弟が生まれた一年後にもう一人の弟が生まれた。その弟は、二人目の弟の生まれ変わりだと私たちは思っている。二人目の弟が無事に生まれてきてくれていたら三人目の弟はいなかったかもしれない。生まれ変わってもう一度私たちと一緒に来てくれたのだと信じている。

昨年、道徳で産婦人科の看護師さんの話を学習した。その話には生きて産まれてくることができなかつた子のが書かれていた。このとき、その子と弟を重ねてしまい、泣きそうになった。お母さんのことも書いてあり、両親もこんな気持ちだったのかと思うと、胸が苦しくなった。

人は、誰もが命の大切さ、尊さを忘れてしまうことがあると思う。私だってそうだ。五体満足で生まれ、家族や友達と幸せに過ごせていることを心のどこかでは当たり前だと思ってしまう。自分がいる。でも、決してそんなことはないのだと弟のことや道徳の授業を通して再確認することができた。自分がこの世に生まれてこられたこと、産んでもらえたこと、それだけで奇跡で、今まで生きてこられたことはとても幸せなことだ。

テレビで時々自殺のニュースが流れてくることがある。辛いことがあったり、生きることが嫌になったりと、人それぞれ理由はあるのかもしれない。それでも、大切な命を自ら失うという選択をすることは、とても悲しいことだと思う。その人にも産んでくれた人がいる。大切にしてくれる人がいる。自分以上に大事にしてくれている人がい

る。自分で「死」を選ぶということは、そのような人たち全員を傷つけ、悲しませてしまうということになるのだ。また、弟のように生きられなかつた子、生きて産まれてくることができなかつた子もいる。そういう子たちの分も私たちは一つ一つの命を大切に、これからも前向きに生きていかなければならないと強く思う。

私が辛いとき、苦しいときに励まし、希望をくれたのは家族と友達だった。みんなのおかげで私は前に進むことができた。だから、今度は私が苦しんでいる人、悩んでいる人に手を差し伸べて希望を与えることができるような人間になりたい。私の声で誰かを勇気付けることができれば、天国で見守ってくれている弟もきっと喜んでくれると思う。

世界に一つのかげがえのない命。私の命がここに存在していること。こうして幸せな生活を送れていること、全てのこと感謝しながら、精一杯私の命を輝かせていきたい。